

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

つ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

みんな悩んで大きくなった！

私が教師になりたての頃、同僚の先輩教師が誇らしげに語っていた、その先生の恩師であるY先生の逸話があります。

Y先生のある道德の時間でのこと。キセル（列車等へ無賃・不正乗車）の話が話題にのぼりました。「実は先生も高校生の頃、一度だけ切符を買わないで改札口を通り抜けたことがあってなあ。」と軽い気持ちで過去の事実を暴露すると、「なーんだ、先生だって悪いことやってたんだ。」と数人の生徒から非難の声が上がりました。ここからがその先生のすごいところ。すぐさま授業中にクラスの生徒全員を近くの駅まで引き連れ、駅員室に乗り込み、子どもたちの前で駅の職員全員に十年以上の前のことを深々と謝罪してみせて、さっと一万円を差し出した、というのです。

Y先生を崇拜し、自分をも「歩く道德教師」とうそぶく彼の姿に、日頃のギャンブル三昧の素行を知っている我々同僚教師は、必死に笑いをこらえながら、話半分に聞いていました。本人は、実話だというのですが、それが本当なら、さぞや相手の駅員の皆さんも大いに面食らったことでしょうし、子どもたちにもかなりのインパクトだったには違いありません。

私も他人のことをあれこれ言えるような、決して道德的とは言えない人間ですが、正直、道德の指導は難しいものです。きれいごとばかり並べて、価値の押し付けのような時間になってしまうことが往々にしてあります。でも、一方で、教師の力量次第で生徒の興味・関心を大いに喚起できる授業ができる醍醐味もあります。やり方を工夫すれば授業する側もおもしろいし、普通の教科指導ではわからない生徒の内面や本性に迫ることもできます。場合によっては、教師自身の人生経験が問われることも往々にしてあるのです。

さて、様々な教育者・心理学者が人間の道德性や道德教育等に諸説を唱えています。人間の道德性に発達段階があるということに異論を挟むものはいないはず。道德教育の理論では、道德性の発

達というのは、外的な統制から内面的な自律的な統制へと、一般的な知的発達と何ら変わることもなく発達する、あるいは発達すべきものだという考えです。

わかりやすく例を上げて説明しましょう。

小さな子供同士が遊んでいます。今自分が使っているおもちゃを友達に「貸して！」と言われました。言われたその子の対応がいくつか考えられます。

- ①貸さないと、お母さんににらまれて叱られるので、不本意だけど貸してやる。それは親切心や仲良くしたいからではない。親に叱られないように振る舞い、罰や苦痛を回避するためだ。
- ②おもちゃを独り占めしたいところではあるが、今貸しておく、今度は僕の好きなおもちゃを貸してもらえるかもしれない。いずれそれ相当の見返りが期待できる。
- ③自分がおもちゃを貸してあげれば、友だちや周りの大人を喜ばせることができるし、自分も認められる。決して、Give and Takeの打算的な欲ではなく、みんなに頼りにされ期待されるから貸してあげる。

端的に表現するならば、①は「罰回避・従順志向」、②は「道具的互惠主義」、③は「良い子志向」ということになります。

ここで、道德性の発達段階から言えば、①⇒②⇒③の順に道德性が高いと言えます。道德性の高さや道德的価値の理解が道德教育のポイントになります。

中学校では、令和2年度から、道德の時間は「特別な教科 道德」として、位置づけられ、係る学習指導要領の一部改正等がなされました。

子どもたちに道德的価値を理解させ、自己を見つめさせるという基本的な指導は変わりませんが、道德的価値の大切さ、本質、意義等を多角的・多面的に考えさせ、議論する道德への転換が求められています。また、生活と乖離しないような題材、「解決策」まで道德の時間に考えさせる「問題解決型」の授業実践が重要とされています。これはとりもなおさず、昨今の、いじめをはじめとする問題行動等の深刻化・複雑化・多様化が背景にあるのは言うまでもありません。

私も若かりし頃、「裏庭の出来事」という題名の、モラルジレンマ、いわゆる葛藤資料をスライド画像とともに自作して、研究授業を実践したことがあります。

教務室の清掃担当だった二人が、教務室で集めたゴミを裏庭の集積所に持っていったときに、ある教科の定期テストの原案のプリントをゴミの中から見つけてしまいます。天使と悪魔のささやきの二人のやりとりがメインの内容です。

生徒には二人でペアになってもらい、「役割演技」をさせながら授業を展開しました。この「役割演技」というのは、道徳の授業での代表的・効果的な活動です。実際の場面に臨場感をもたせ、立場を代えながら「自分だったらどうするか」「自分で何ができるか」を自分事として考えさせ、解決への見通しをもたせることを意識した指導がポイントでした。

実はこの自作資料、私の中学校時代の実話がベースになっています。私と仲良しだった友達二人で同じような経験がありました。一方は、「ばれないから二人だけの秘密にして、テスト用紙を持って帰ろうよ。」と言い、もう片方は、心の中では一瞬ラッキーと思いつつも、「やばいよ。先生に正直に言って戻そうよ。」と主張し、結局後者を選択したのでした。実際は、先生には「あ、いいよいいよ、それ本番で使わないから」と軽く流されてあっけなく事は終わりを告げたのですが。

因みに、道徳の分野で最も著名なハーバード大学教授であったローレンス・コールバーグ(1927～1987)は、道徳性発達段階の最高レベルは、『正義』と『慈愛』の原理が相互に指示し合い調和するレベルであり、この段階を代表する人物として、キリスト、ソクラテス、仏陀、孔子、リンカーン、キング牧師などを挙げています。

かつて大手洋酒メーカーの有名なテレビCMで、タレントで直木賞作家の野坂昭如氏も「ソ、ソ、ソクラテスカサルトルか、ニ、ニ、ニーチェかプラトンか、みんな悩んで大きくなった。大きいわ、大物よ・・・」と歌っていました。そうだ、どんな偉人だってみんな悩みながら成長してきたに違いありません。悩んでいるのは君だけではないのです。私もそうでした。

実際の「裏庭の出来事」での私の友人は、当時も今も、道徳性の発達段階は私より遥かに上の人間です。私が、前者(秘密にしようよ)、後者(正直に言おうよ)のどちら側であったのか? 皆さんはもうお分かりですよ。